

《書評》

Joseph Bristow and Rebecca N. Mitchell,

*Oscar Wilde's Chatterton: Literary History, Romanticism,
and the Art of Forgery*

New Haven: Yale UP, 2015.

原田 範行

本書は、オスカー・ワイルドが1886年に作成した、いわゆる「チャタートン・ノートブック」の詳細な分析を基礎に、この早逝したロマン派詩人へのワイルドの強い関心と創作との関係を、特に1880年代後半の彼の作品群を対象にしつつ、しかしより広くは、後期ヴィクトリア朝文学におけるロマン派の影響や、芸術的独創に隣接する贋作や剽窃のダイナミズムなどを視野に入れて考察した研究書である。著者は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授で、世界最大のワイルド・コレクションを所蔵するウィリアム・アンドリュース・クラーク記念図書館での調査研究を指揮するジョウゼフ・プリストウとバーミンガム大学講師のレベッカ・N・ミッチェル。「チャタートン・ノートブック」の精密な転写と、それをもとにした綿密な考察が一方にあり、他方で、後期ヴィクトリア朝における中世主義やロマン派的想像力の変容を、ワイルドにあくまでも焦点を絞りつつもこれを広い視野から描き出すなど、資料的価値と深い洞察、時代状況への的確な目配りなどの点で高く評価できる好著である。

「私はチャタートンを思う、あの驚くべき少年のことを」とワーズワースが「決意と自立」に歌った詩人トマス・チャタートンは、1752年、ブリストルに生まれ、1770年、わずか17歳でこの世を去った。当時暮らしていたロンドンの家の屋根裏部屋で、貧窮の内に砒素を飲んで自死を遂げたのである。早くから詩才を発揮し、チャタートンをはじめとする中世的世界に強く惹かれていた彼は、やがて、エドワード4世治下の15世紀に活躍した

という触れ込みの架空の詩人トマス・ローリーの名で、いわゆる「ローリー詩群」と呼ばれる詩を発表するようになる。もちろんこれは贋作である。作品出版のための経済支援を懇請したホラス・ウォルポールなどには、これが贋作であることをいち早く見抜かれてしまうのだが、チャタートンの文名は、やがて、その悲劇的な死とともに、ロマン派詩人として英雄視さえされるようになっていく。特に後期ヴィクトリア朝にあっては、1856年にロイヤル・アカデミーの夏季展覧会に出品されたヘンリー・ウォリスの「チャタートンの死」による視覚的影響も大きかったであろう。鮮やかな色使いと細部の精密な描写によって自死直後のチャタートンを蘇らせたこの油彩画を、ジョン・ラスキンは「非の打ちどころのない傑作」と賞賛している。ワイルドのチャタートンへの関心の端緒にも、おそらくはこのウォリスの油彩画から受けたある種のインスピレーションがあったに違いない。

1886年10月、ワイルドはチャタートンに関するエッセイを、『センチュリー・ギルド・ホビー・ホース』という年4回刊行の高級芸術誌に掲載する予定であった。現在、カリフォルニア大学ロサンゼルス校のウィリアム・アンドリュース・クラーク記念図書館が所蔵する「チャタートン・ノートブック」は、おそらくこのエッセイを準備する過程でワイルドが作成したものと推定される。メモ書きの分量は、クォート版82葉(164頁)ほど。もっとも、肝心のエッセイは結局発表されることはなかった。その代わりワイルドは、同年11月24日、ロンドンのパークベック・リテラリー・アンド・サイエンティフィック・インスティテューション(現在のロンドン大学パークベック・カレッジ)で、チャタートンに関する公開講演をおこなっている。講演原稿は残されていないが、この「チャタートン・ノートブック」を下敷きにしていたであろうことは容易に推測される。800人もの聴衆が、弱冠32歳のワイルドの講演に押しかけたという。

従来、その存在は知られていたものの、精密な転写という形で公刊されることのなかったこの「チャタートン・ノートブック」を基礎にした本書は、六つの重要な考察を次の六つの章でそれぞれ論述する、という構成になっている。まず第一章は、チャタートンの人生と作品執筆の経緯に焦点を当て、その評価が後の伝記作者たちによって確立していく過程を考察する。なかでもデイヴィッド・マッソンやダニエル・ウィルソンといったヴィクトリ

ア朝中期から後期にかけての伝記作家が果たした役割は大きい。「チャタートン伝説」と題された第二章は、ヴィクトリア朝においてチャタートン像が、いかにロマンティックに受容されポピュラーになっていったのか、その様子を当時のさまざまな表象を通して分析する。ウィルキー・コリンズもディケンズもハーディもルイス・キャロルも登場する。名優ウィルソン・バレットがチャタートンを演じた一幕物の演劇『チャタートン』の写真資料も印象的で、バレットが演じる自死を遂げたチャタートンの姿は、ウォリスの油彩画にそっくりである。このようなチャタートンにワイルドが具体的にどのように接近したのかを考察したのが、次の第三章である。オクスフォード時代から、キーツやシェリーといったロマン派詩人に強く惹かれていたワイルドであってみれば、チャタートンへの注目は「自然な関心の拡がり」（本書109頁）であったのだが、それとともに、マクファーソンが創作したオシアン詩人の作品に対するワイルドの関心も見逃せないであろう。言うまでもなく、その主人公フィンガルはワイルド自身の名前の一部であり、ローリー詩群もオシアンも贋作ではあるが、ともに古代・中世的世界への強いロマン派的想像力によって創作されたものにほかならない。本書の中心となる第四章では、言うまでもなく「チャタートン・ノートブック」の成立経緯とその性格が綿密に考察されている。オクスフォード時代のノートブックにせよ、後に『獄中記』としてまとめられる監獄での手稿にせよ、ワイルドにとってのノートブックは、さまざまなアイデアや考察の貯蔵庫であり、優れた寸言や警句の備忘録であった。ただ本書の筆者は、この章に「贋作芸術と剽窃の責め」という副題を付している。それは、この「チャタートン・ノートブック」が作成される過程でワイルドが、一方では、チャタートンの贋作からその優れた想像力を独自に読み取ろうとしていたことが分かるからであり、しかし他方で、ウィルソンなどによるチャタートンの伝記の抜粋を基本とするこのノートブックは、従来の研究ではしばしば、チャタートンに関するワイルドの言及のほとんどが剽窃であると論断する根拠の一つにもなってきたからである。実際、オクスフォードの全集版第4巻で「歴史批評」関係のノートブックを扱ったジョゼフィン・M・ガイなどは、冒頭で述べた1886年11月のチャタートンに関するワイルドの講演は、ノートブックに記された伝記作家の記述を剽窃したものであると論じてい

る。しかし本書の筆者は、この「剽窃」という考え方に疑義をはさみ、チャタートンの人生と作品に見られる想像力と創造力に対してワイルドは、伝記的記述を参照しつつもこれを独自の形でよりダイナミックに展開しようとしていたとし、ワイルドのチャタートンに対する姿勢をむしろ積極的に評価しようとしている。そしてそのことを、次の二つの章で、ワイルド作品とともに具体的に論じている。すなわち、「ワイルド、贋作、犯罪」と題された第五章は、「ペン、鉛筆、毒」や「嘘の衰退」、「アーサー・サヴィル卿の犯罪」などを具体的な対象としつつ、贋作執筆と犯罪が、ワイルドの中でいわば相互に触媒として反応しあい、それが、芸術的創造性につながっているということを描き出している。また、「文学史を贋造する」と題された第六章では、「W・H氏の肖像」を対象に、過去に及ぶ豊かな想像力と、ときには贋作的性格をも帯びるそうした想像力の表現を、いわばチャタートンの遺産としてワイルドが受け継ぎ、それを作品として結実させたとしている。

本書は、本文315頁に加えて、「チャタートン・ノートブック」の転写などの補足資料が100頁にわたって付されている。論述は堅実で入念、細部についても安心して読める。その優れた点を改めて整理するならば、少なくとも次の三点を挙げることができるだろう。もちろんその第一は、これまで公刊されず、また十分な考察もなされてこなかった「チャタートン・ノートブック」の全容を、本文校訂と出典調査によって明らかにしたことである。前述したように、ワイルドには、オクスフォード時代の「オクスフォード・ノートブック」や「歴史批評ノートブック」、監獄で書き残したものなど、数多くの手稿が存在する。ワイルド自身、こうした手稿を大事にしていたことは、書簡などからもうかがえる通りである。手稿類の閲覧がかなり自由になった今、それらを詳細に、かつ網羅的に分析することが、まずは研究者にとって急務と言えよう。本書は、その転写内容ももちろんだが、転写のための綿密な指針や記述内容の扱い方についての方針など、いずれにおいても今後のこうした調査研究の参考になるものと言える。

優れた点の第二は、「チャタートン・ノートブック」の分析を、ワイルドの伝記的観点およびヴィクトリア朝におけるロマン派受容という二つの重要な文脈に、堅実な考察を通して見事に接続させている点である。「チャ

「チャタートン・ノートブック」が作成されたのは1886年。彼が、講演や記事、批評、エッセイなどを中心とする初期の作品群から、創作を中心とする中期作品群へと移行しつつある時期である。まさにその過程にあって、チャタートンという稀有な想像力を有した詩人にワイルドが着目したことの伝記的な意味は大きい。本書はまずそのことを、1880年代後半のワイルドの作品群に焦点を当てて具体的に分析するとともに、そうしたワイルドのチャタートンへの注目が、彼の個性を示すのと同時に、実は後期ヴィクトリア朝の文学的傾向を多分に反映したものであることを鮮やかに論じている。本書に詳述されている後期ヴィクトリア朝におけるチャタートンのさまざまな表象は、チャタートンをはじめとするロマン派詩人の研究者一般にとっても裨益するところが少なくないであろう。もちろんその中においてワイルドは、彼独自の感性によってチャタートンを吸収し、それを独創性の高い創作に昇華したのである。

第三の優れた点は、本書が、ワイルドのチャタートン理解を通じて、贋作と剽窃という芸術的創造にいわば隣接した表現行為に注目し、それを、ワイルドの作品執筆のダイナミズムの中で捕捉することに成功しているという点であろう。贋作も剽窃も、例えば学術論文の執筆作法などからみるならば、一般に認められるような行為ではない。だが、そもそもすべての芸術は、何らかの形で模倣を前提とする。古典古代の作品から現代の大衆的な読み物に至るまで、それらを旺盛に吸収し、しかもそれを独自の解釈によって再生もしくは新生させていたワイルドであってみれば、模倣は、彼の秘められた創作工房に迫る重要な手がかりになるはずだ。そういう彼の創造力の源泉の近くに、贋作者チャタートンの姿が確実に宿っていたことを、本書は明確に示しているのである。

このように本書は、きわめて有益な研究成果をまとめたものであると言えるのだが、もちろん不足や不満を感じる部分がないわけではない。例えば、本書の視野には明らかに1890年代のワイルドの喜劇作品が入っているが、それらの具体的な分析は本書ではなされていない。もちろんこれは、「チャタートン・ノートブック」をもとに考察を進めるにはあまりに異質な課題が多く、両者を統合的に論じるには、彼の劇作手法をはじめ、なお多くの準備的考察が必要になることによるものであろう。ある意味では筆者

の賢明な選択と言ってもよいのだが、しかし、1890年代の喜劇作品に言及している以上、少なくとも何らかの見通しを示す一章を設けてもよかったのではないだろうか。また、特に本書の第6章で考察されている「芸術的直観によって理解されるもろもろの過去の概念」(本書250頁)についても、伝統や古典的規範、アイリッシュネスなどへのワイルドの意識を探る手がかりとして、そしてまた彼のチャタートン理解の本質に迫る上でも、より本格的な考察がなされてもよかったと思われる。それは、本書全体にかかわるテーマでもあるからだ。さらにもう一つ付け加えるとすれば、本書によって明らかになった「チャタートン・ノートブック」そのものについてのより詳細な分析や注釈も求められるのではないかと、いうことだ。例えば、本書401頁から402頁にかけての転写には、1776年、サミュエル・ジョンソンがボズウェルとともにブリュストルを訪れ、チャタートンのことを語るというエピソードについてのウィルソンの伝記からの引用がある。ノートブックの73 versoだ。ワイルドは74 rectoに“1776 Johnson and / Boswell visit Bristol / see Catcott see opp.”なる書き込みを記してもいる。だが、ノートブックにおけるウィルソンからの引用は、この直前に至るまで、チャタートンの少年時代からブリュストルを離れるまで、すなわち、ワイルドが用いたとされる1869年版のウィルソンの伝記では、最初から240頁前後までの部分を順番に進んでいた。それがなぜここに至って、ジョンソンのチャタートン評に言及した箇所(ウィルソンの伝記では88頁)に戻ったのか。このあたりのワイルドのノートブック作成経緯の詳細はなお不明である。

もっともこうした不足を今後補っていくことは、本書によって多くの恩恵を受けた読者にとっては、むしろこの上ない喜びと言ってもよいかもしれない。それこそワイルドの、そしてワイルドを通して新生したチャタートンの、芸術的創造の源流に肉迫することにほかならないからである。